



＜コミュニケーション＞の比喩表現：日英比較の観点から

鈴木，幸平

(Citation)

神戸言語学論叢, 6:20-31

(Issue Date)

2009-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001518>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001518>



＜コミュニケーション＞の比喩表現 ——日英比較の観点から——

鈴木幸平
神戸大学大学院

1. はじめに

本研究では、日本語で使用される傾向が高いと言われる＜コミュニケーション＞を表す液体表現を対象に、概念メタファー理論 (Lakoff 1993 等)の立場から、コーパスを用いた分析を行い、以下の二点の結論が導き出せることを示す。

- ① 英語と日本語では、＜コミュニケーション＞の意味を表す液体表現の種類(タイプ頻度)には、それほど違いがない
- ② 液体表現の種類には大きな違いがないにも関わらず、液体表現が実際に用いられる回数(トークン頻度)には大きな違いが見られる

さらに本稿は、今までのメタファー理論では、あるメタファー表現が容認されるか否かに焦点が当てられていたことに触れ、メタファー表現として容認されても実際に用いられる頻度に大きな隔たりがある、という現象についても考察を行う。

2. 先行研究

概念メタファー理論はメタファーを「起点領域から目標領域への(数学的な意味での)写像関係」(Lakoff 1993; 206, 207)と定義付け、メタファー写像の結果として、抽象的な概念を具体的な概念で表現することが可能になると主張する。以下の例を見られたい。

(1) You're *wasting* my time.

(2) How do you *spend* your time these days?

(1), (2)は、TIME IS MONEY と呼ばれるメタファーの例であるが、‘waste’, ‘spend’という、本来は＜金＞に関する意味を表す語が＜時間＞を表す語として用いられている。

我々の周りには＜時間＞以外にも、＜感情＞や＜議論＞等、多くの抽象概念が存在する。＜コミュニケーション＞もこうした抽象概念の一つであり、他の具体的な概念を表す言葉を用いて表現される傾向がある。この点について、池上 (1988)や野村 (1996,

2002)は、日本語は<コミュニケーション>を<液体(流動体)>¹を表す表現で表現する傾向が高く、英語は<個体(固体)>を表す語で表現する傾向が高い、と主張する。

さらに、野村(2002)は<コミュニケーション>を表す液体表現を以下の4つのメタファーにまとめることができると主張している²。

- a. 「言葉を話す／書くことは液体を発することである」
- b. 「言葉の流暢さは液体の流れの速度である」
- c. 「言葉の理解しやすさは液体の透明度である」
- d. 「言葉を聞く／読むことは液体を受け入れることである」

本研究では a-d を<Letting out>, <Rapidity>, <Transparency>, <Absorption>と呼ぶ。(3)-(6)は a-d に分類される具体例である。

- (3) 言葉を漏らす <Letting out>
- (4) 淀みなく話す <Rapidity>
- (5) 言葉を濁す <Transparency>
- (6) 言葉が心に沁みる <Absorption>

<液体>で<コミュニケーション>を表現する日本語に対し、英語は<コミュニケーション>を<個体>として表現する傾向が高いと主張されているが、<個体>は以下の「容器のメタファー」³に当てはまるものであると考えられている。

- e. 言語は思考を運んで移動する容器である
- f. 言葉を話す／書くことは語の中に考えや感情を詰め込むことである
- g. 言葉の移動は他方に運んでいる思考・感情が到着することで達成される
- h. 聞き手は言葉から意味・感情を取り出す

¹ 野村(1996)は、<fluid>(流動体)を用いているが、野村(2002)は<液体>を用いている。<流動体>と<液体>は異なる概念であるが、本論ではこの議論には立ち入らず、以降は<液体>を用いる。

² 野村(1996, 2002)は a-d 以外にも「意味が言葉になる」というメタファーも挙げている。しかしながら、「意味が言葉になる」は<液体>より<連続体>としての<言語>を意図したものであり、特有の液体表現も少ないことから考察から除外した。

³ 「あふれる」のように、<液体>にも容器のメタファーに当たる表現は多数存在する。ここでは液体表現を除いた<個体>の容器のメタファーという意味で用いている。

Nomura (1996)は、＜個体＞のメタファー表現として以下の例文を挙げている。

(7) None of Mary's feelings came through to me with any clarity.

(8) He flung words at me.

(9) Try to pack more thoughts into fewer words.

(10) He could scarcely catch the words.

(11) Can you actually extract coherent ideas from that prose?

このうち、(7)、(8)は思考や言葉の移動を表す e、(9)は語の中に思考を詰め込む事象を表す f、(10)は言葉の「到着」を表す g、(11)は言葉から思考を取り出す状況を表す h に分類される例である。

このように、野村は、＜コミュニケーション＞の表現として日本語では液体表現を、英語では＜個体＞の表現を多く挙げている一方で、日本語の個体表現や英語の液体表現についてはほとんど挙げていない。大石 (2006)はこれらの野村の主張を以下のようにまとめている。表 1 の◎は表現が最も多いことを表し、以下、▲、△の順で使用頻度が少なくなることを表している。

	Japanese	English
fluid	◎	△
object	▲	◎

表 1 Nomura (1996)の主張 (大石 2006)

野村に対し、大森 (2004)、辻本 (2004)は、英語も日本語と同じように、多くの液体表現を＜コミュニケーション＞に拡張して用いると主張する。特に辻本 (2004)は野村の挙げた a-d について、全て英語にも当てはまる例が存在することを示している。

「言葉を話す／書くことは液体を発することである」

(12) The voice of the news-reader *flowed* smoothly on.

(13) I heard voices and music *spilling* from the house.

「言葉の流暢さは液体の流れの速度である」

(14) Speakers do tend to look at listeners more during *fluent* speech than during

hesitant speech.

「言葉の理解しやすさは液体の透明度である」

(15) His explanation was as *clear* as mud.

(16) The prose is *turbid*, muddled by jargon.

「言葉を聞く／読むことは液体を受け入れることである」

(17) He saw his own words *sink* deep into her mind like water into a secret thirst.

(18) I *absorbed* the message about who should be beaten at all cost.

(12)-(18)が示すように、野村が挙げる a-d のメタファー表現は、全て英語でも見つかる。また、大石 (2006)は日本語の<個体>のメタファー表現を a-d に合わせて挙げており、「日本語では<個体>に関する表現より<液体>に関する表現を<コミュニケーション>に拡張して用いる傾向が高い」という点に対して反論を行っている。例えば (19)-(21)は全て a の、「言葉を話す／書くことは液体を発することである」の例である。

(19) メッセージを投げる

(20) 言葉を放つ

(21) 意見をぶつける

(19)-(21)は、液体表現であれば<Letting out>に当たり、多数の<コミュニケーション>に関する個体表現が日本語にも存在することが伺える。このように「言葉は英語においては<容器>という<個体>として捉えられるのに対して、日本語においては<液体>という<連続体>として捉えられる (野村 2002; 49)」という野村の主張は、表現の種類においては支持されない可能性が高い。

しかしながら、これらの先行研究では、1) あるコーパスで何種類の液体表現が<コミュニケーション>に拡張されるか、2) どれだけの頻度でこうした表現が用いられているかが明らかにされていない⁴。このため本論文では、まず、先行研究が問題にしてきた、<コミュニケーション>に拡張して用いられる液体表現が日英語で、何種類ある

⁴ 野村 (2002)は、「これ (日本語で言葉が<液体>として捉えられること) は傾向の問題であって、逆の概念化がされる場合もある」と述べており、表現が用いられる頻度を考慮に入れていると考えられるが、量的なデータは提示されていない。

か観察する。次に、メタファー表現が実際に用いられている頻度について考察を行う。

3. コーパス調査

3.1 方法

本論文では以下のコーパスを用いてデータ収集を行った。

日本語：「現代日本語書き言葉コーパス」

英語：‘Wordbanks Online’

現代日本語書き言葉コーパスは、国立国語研究所で作成中の均衡コーパスである。本研究で用いたものは2008年10月の段階で配布されたものである。Wordbanks Onlineは、話し言葉も含む、英語の均衡コーパスであるが、本研究では日本語と比較するため、新聞、小説のサブコーパスに調査の対象を絞っている。

日本語では「言葉」と「情報」、英語では *word* と *information* を検索語とし、例文を収集した。ただし、本研究の段階では日本語と英語で例文の収集方法が異なっており、日本語では「言葉」、「情報」を含む全ての例文から、＜液体＞から＜コミュニケーション＞に拡張されたメタファー表現を収集したが、英語では Berkeley FrameNet や先行研究を基に検索する液体表現を定め(Appendix I)、これらの液体表現が *word*, *information* と共起する文を対象に分析を行った。それぞれの検索語のヒット数は以下の通り：*word* 12439 件、*information* 5108 件、「言葉」6329 件、「情報」2208 件。

3.2 結果

3.2.1 ＜コミュニケーション＞に用いられる液体表現の種類

まず、＜コミュニケーション＞に拡張された液体表現の種類（タイプ頻度）について述べる。表2を見られたい。

	<Letting out>	<Rapidity>	<Transparency>	<Taking>	<Others>	総語根数
英語液体表現	13	7	0	6	4	26
日本語液体表現	15	2	2	10	4	28

表 2 ＜液体＞から＜コミュニケーション＞に拡張された表現の種類

表2は、コーパス中の例を a-d の＜コミュニケーション＞の意味を表す液体表現のメタファーに分類した結果を表している。例えば、英語液体表現と<Letting out>が交わ

るセルの‘13’は、*flow*, *leak* 等、<Letting out>に当てはまる用法が 13 種類存在することを示している。総語根数は<コミュニケーション>に拡張された液体表現のタイプ頻度の合計である。ここで、<Letting out>から<Others>までの合計と「総語根数」は一致していないが、これは、<Letting out>から<Others>までは、*flow out*, *flow into* のように同じ動詞が前置詞の違いで複数のカテゴリーに属している場合や、「浴びせる」、「浴びる」のように、同じ語根を持つ動詞が自他交替により異なるカテゴリーに分類される場合は、同じ語根であってもそれぞれのメタファーで独立に数えているのに対し、「総語根数」では日英語の違いを考慮して、液体表現の種類を、語根を単位として数えているためである。

総語根数が示すように、日本語には 28 種類、英語では 26 種類、<コミュニケーション>に拡張された液体表現が存在し、液体表現のタイプ頻度については両言語の間で大きな違いは見られない⁵。このことから大森 (2004)や辻本 (2004)が主張するように、英語にも十分な数の<コミュニケーション>を表す液体表現が存在するといえよう。<Letting out>に限っても、(22), (23)のように、*leak*, *flow* のように頻繁に用いられる表現だけでなく、(24), (25)のように、使用頻度が低い表現も<コミュニケーション>に拡張して用いられる。

(22) Word will *leak out*...

(23) Words *flow* smoothly, and with strength.

(24) His word *roiling* together, as if in a stream of consciousness,

(25) I *hiss* these words into Zelda's face.

両言語は全体的なタイプ頻度には違いがないが、局所的には違いが見られる。ここでは<Rapidity>と<transparency>についてみる。<Rapidity>は英語の液体表現のタイプ頻度が日本語の液体表現のタイプ頻度を上回る唯一の意味分類であり、日本語では 2 種類、英語では 7 種類の表現が見つかった。

<Rapidity>

- a. 日本語：
ほとばしる、淀む

⁵ $\chi^2_{(4)}=5.79$ $p>.05$ で、統計的にも両言語で違いが見られる、という積極的な証拠は得られなかった。

b. 英語：

course (V), gush, roil, rush, run, spew, spout

<Rapidity>は液体がどのように移動しているか、つまり移動様態を表す液体表現が＜コミュニケーション＞に拡張された例である。英語の方が<Rapidity>に当たる表現が比喩拡張されるということは、'the river runs into the cave'のように移動の経路を前置詞(into)で表し、<Rapidity>等、移動様態を動詞(run)で表す傾向が高い英語(S 言語)と、「川の水が勢いよく洞窟に流れ込んでいる」のように経路を動詞(流れ込む)で表し、移動の様態を動詞でなく、修飾要素(勢いよく)で表す傾向が高い日本語(V 言語)の違いを反映していると言えよう。また、Özçalışkan (2004)の、英語のような S 言語では、*run, gush* のような様態表現を比喩的に拡張する頻度が V 言語(日本語)に比べ高いという主張や、鈴木 (to appear)の、日本語の様態を表す非主要部の液体表現(「ごーごー」、「ちょろちょろ」等)は、ほとんどメタファー表現として意味拡張されないという主張も、<Rapidity>に当たる表現が英語で多く見られ、日本語ではあまり見られないことを予測する。

次に、<Transparency>に当たる表現は、日本語では「澄む」、「濁る」が存在する。その一方で、英語には *stall, turbid, muddy* 等、<Transparency>に分類される可能性がある表現はあるが、本研究のデータではこれらの表現が＜コミュニケーション＞に拡張された例は見られなかった。

以上のことから、各メタファーで細かい違いはあるものの、＜コミュニケーション＞を表す表現のタイプ頻度は、28 種類(日本語)と 26 種類(英語)で、両言語で大きな違いは見られなかった。この点で大森 (2004)、辻本 (2004)の、英語も多様な液体表現を＜コミュニケーション＞に拡張して用いるという主張は支持される。次節では、液体表現が用いられるトークン頻度について論じる。

3.2.2 液体表現が＜コミュニケーション＞に拡張される頻度

本節では、液体のメタファー表現がコーパスの中で、実際に何回用いられているかについて考察する。表 3 を見られたい。

	液体表現数	語・情報総数	確率
英語	133	17547	0.75%
日本語	328	8537	3.84%

表 3 <コミュニケーション>表現における液体表現の比率

表 3 の「液体表現数」は両言語で用いられた<コミュニケーション>の液体表現の使用数(トークン頻度)、「語・情報総数」は英語では *word, information*、日本語では「言語」、「情報」で検索した際のヒット件数、「確率」は「語・情報総数」の中で液体の比喩表現が占める割合を表している。表 3 より、語・情報に当たる表現の母数は英語が日本語の約 2 倍有しているが、液体表現のトークン頻度は逆に、日本語が英語の二倍以上の使用頻度があることが分かる。このため、日本語で<コミュニケーション>を表す例のうち、液体表現が占める割合は、3.8%であるのに対し、英語では 0.75%と両言語の間で大きな違いが見られる。 $(\chi^2_{(1)} = 300.63, p > .001)$ で統計的にも有意)

3.2.1 で見たように両言語で<コミュニケーション>に拡張して用いられる液体表現の多様性にはほとんど違いがないにもかかわらず、これらの表現が実際に用いられる頻度については大きな違いが見られるのである。これらの結果を大石 (2006) に倣ってまとめると以下の表のようになる。

	日本語	英語
タイプ頻度	◎	◎
トークン頻度	◎	△

表 4 <コミュニケーション>に拡張される液体表現のタイプ/トークン頻度

要するに、<コミュニケーション>に拡張される液体表現の種類については大森や辻本の言うように、英語も豊富に保持しており、両言語でほとんど違いがない。一方で、液体表現が用いられている頻度に目を移すと、日本語と英語の液体表現の使用頻度には大きな開きがあり、池上、野村の主張を支持する結果となる。

4. 考察：概念メタファー理論に与える示唆

本論文で得られた結果は概念メタファー理論に一定の示唆を与える。概念メタファー

理論では、あるメタファー表現が容認されるか(言語内、言語間比較共に)、について多くの研究がなされてきた (Lakoff 1993; Grady 1997; 鈴木 2005, 2008; 松本 2007 等)。

概念メタファー理論はメタファーを「起点領域から目標領域への写像」定義すると述べたが、このうち Lakoff (1993)は写像に対する制約として「着点領域と矛盾する要素は写像されない」という不変性原理を主張している。

(26) クリスマスが近づいてくる

(27) *クリスマスがジグザグと近づいてくる

(28) *クリスマスが上ってくる

不変性原理から(26)-(28)の違いは「＜時間＞は一直線に進むため、二次元・三次元に関わる概念を持ちえないが、(27), (28)の「ジグザグ」や「上がる」はこうした概念を表すため、矛盾が起こり、結果として表現が容認されない」、と説明される。また、Grady (1997)も、説明原理は異なるが、あるメタファー表現が容認されるかどうかを写像が存在するかどうか、というレベルで分析を行っている点で不変性原理と共通している。

これに対し、鈴木 (2005, 2008)、松本 (2007)は写像が存在していても、メタファー表現として実現しない例が存在することを指摘し、この問題の解決には個々の語の語彙的制約を基に記述・考察することが有効であることを指摘している。

(29) 理論の構築に{*着工/着手}する

(30) {研究/工芸品の制作}に{着手/*着工}する

松本 (2007)は(29), (30)の「着工」と「着手」の違いは、「着工」という語が「工事の作業工程」を含意しており、複雑な作業工程を必要とするため、「理論」等、複雑な作業工程を必要としない抽象概念に用いることはできないと指摘している。

このように、鈴木 (2005, 2008)や松本 (2007)はメタファー表現の容認の可否が写像という抽象的なレベルでなく、個々の語彙の制約という具体的なレベルに基づくことを指摘した点で大きな意味を持つ。しかしながらこれらの研究は全て、あるメタファー表現が容認されるか否か、に焦点を当てている。このため、本稿で観察した「あるメタファー表現が容認されるにもかかわらず、実際には使用頻度が低い」現象については考察することができない。しかし、このような現象は、ある概念を理解する傾向の言語間での差異や、談話によるメタファー表現の嗜好の違い、コーパスの種類による表現の違いを表している可能性があり、概念メタファー理論に対して、重要な問題を孕んでいると

言えよう。

5. 結論

本研究ではコーパスを用いて、日本語と英語で＜液体＞表現が＜コミュニケーション＞に意味拡張している例について調査を行い、以下の結果を得た。

1. ＜コミュニケーション＞を表す液体表現の種類数は両言語でほとんど同じで、いずれの言語も豊富な言語表現を用いて、＜コミュニケーション＞を＜液体＞として表現することが可能である。
2. しかしながら、両言語では、実際に＜コミュニケーション＞を＜液体＞で表現する頻度に大きな隔たりが見られる。

また、本論文は、先行研究では、あるメタファー表現が容認されるか否かに研究の主眼が置かれ、「可能であるが、用いられる頻度に差がある」という現象についてほとんど研究がないことに触れ、こうした現象について研究を行っていく必要性を指摘した。

今後の課題として、より多くの語を対象として分析を行い、本論文で得られた結果を補強する必要があること、＜コミュニケーション＞以外の抽象領域でも本研究でみられたようなタイプ頻度とトークン頻度の乖離が見られるか、検証が必要であることを挙げる。

Appendix 1: 英語液体表現の検索語彙

bubble, cascade, course, current, dribble, drip, drop, drown, dunk, flood, flow, fluent, fluently, gush, hiss, jet, leak, ooze, outwell, overflow, percolate, pour, purl, roil, run, rush, seep, shower, soak, souse, spew, spill, splash, spout, spray, spurt, squirt, stagnate, stream, trickle, well, river, pond, ocean, sea, lake, stagnant, wring

Appendix 2: ＜コミュニケーション＞に拡張される日英語の液体表現

<Letting out>

a. 日本語：

浴びる、あふれる、かける、汲む、こぼす、絞る、垂れる、流れる、噴く、満ちる、漏れる、リークする、流出する、漏洩する

- b. 英語：

current, drip, drop, flood, flood, flow, hiss, leak, ooze, overflow, pour, spill, well

<Rapidity>

- a. 日本語：

ほとばしる、淀む

- b. 英語：

course, gush, roil, rush, run, spew, spout

<Transparency>

- a. 日本語：

澄む、濁る

- b. 英語：

φ

<Absorption>

- a. 日本語：

浴びる、かける、吸う、流れる、漏れる、吸収する、汲む、沁みる、浸透する、飲む

- b. 英語：

flow, drop, pour, shower, soak, wring

<others>

- a. 日本語：

溺れる、海、氾濫する、水を差す

- b. 英語：

drown, river, sea, stream

参考文献

Grady, E. J. 1997. Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes. Ph.D. Dissertation, University of California at Berkeley.

- 池上嘉彦. 1988. 「意味」の拡がり」. 『月刊言語』 18(9), 44-49.
- Lakoff, G. 1993. The contemporary theory of metaphor. In Ortony, A. (ed.) *Metaphor and Thought*, 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松本曜. 2007. 「語におけるメタファー的意味の実現とその制約」. 山梨正明他(編). 『認知言語学論考:No.6』 pp. 49-93. ひつじ書房.
- Nomura, M. 1996. The ubiquity of the fluid metaphor in Japanese: A case study. *Poetica* 46, 41-75.
- 大石亨. 2006. 「水のメタファー」再考: コーパスを用いた概念メタファー分析の試み」. 『JCLA 6』, 277-287.
- 大森文子. 2004. 「認知・談話・レトリック」大堀壽夫 (編). 『認知コミュニケーション論』 pp. 161-210. 大修館書店.
- Özçaliskan, S. 2004. Typological variation in encoding the manner, path, and ground components of a metaphorical motion event. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 2, 73-102, Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- 鈴木幸平. 2005. 「感情の容器メタファーに関わる制約」. 『大阪外国語大学言語社会学会研究会報告集』 Vol.7, 57-68.
- 鈴木幸平. 2008. 「流体の経路表現の意味拡張について」. 日本言語学会第 136 回大会ポスター発表資料.
- 鈴木幸平. 近刊. 「液体移動に関わる経路・様態表現の意味の拡張範囲」. 『JCLA 9』.
- Talmy, L. 2000. Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 辻本智子. 2004. 「英語における導管メタファーの根源領域としての<液体>」. 『JCLA 4』, 253-262.